

大札の議における慈寿皇太后の懿旨の意味

前田尚美

目次

はじめに

第一章 正徳帝の崩御

慈寿皇太后

嘉靖帝の即位事情

第二章 嘉靖年間初頭の動向

大札の議の端緒

慈寿皇太后の動き

第三章 大札の議の決着と慈寿皇太后

聖母から皇伯母へ

慈寿皇太后の権威の変化

おわりに

はじめに

中国歴代王朝を通観したとき、皇位継承問題がそのまま政治に影響する事が少なくない。皇帝や皇位継承者の不在はそれだけで問題であり、ましてや皇帝権力が非常に強化された明代においてそれは即政治的空白を意味し、より深刻なものになったと言える。

明代では皇位継承について、初代洪武帝の遺訓である『皇明祖訓』では、

凡そ朝廷に皇子無ければ、必ず兄終われば弟に及ぶ。嫡母から生まれた者を立てなければならず、庶母から生まれた者は年長であつても即位してはならない。もし嫡子ではなく庶子を立てようとする奸臣がいても、庶子は必ず分を守つて動いてはならない。報告して嫡子を立て、務めて嫡子を即位させ、奸臣は斬るべし。⁽¹⁾

としている。つまり当初から嫡子絶対優先の嫡出主義が謳われている事がわかる。実際には嫡子相続の例は非常に少なく、長子相続が多かつたのではあるが、原則的には明一代を通じて遵守された。

しかしこの規定があるからといって、皇位継承問題が生じなかつたわけではない。

今回取り上げる例である嘉靖帝は、前段階として崩御した正徳帝に嫡子どころか子がいなかった。つまり傍流から迎えられるの即位であり、そもそも皇位継承の正当性について問題があつた事に加え、即位直後から廷臣たちとの対立が政治問題化した大札の議も起こるといふ大事態に発展したのである。

これらの問題に深く関わってくるのが、正徳帝生母の慈寿皇太后であつた。

皇位継承問題が生じた時、その対処に皇太后や皇后が絡む事は、それまでの中国王朝でも珍しくなく、明代でも初の幼帝である正統帝即位の際、正統帝が当時皇太子であつたにもかかわらず、その幼さゆえに別の人間を立てようとする

動きが見られたが、太皇太后がそれを收拾した例はその典型であらう。⁽²⁾

このように明代の皇位継承問題の最終決定は、皇太后及び太皇太后の命令、つまり懿旨によってなされた。皇帝や皇位継承者が不在もしくは不明の場合、皇太后は皇帝に代わる者として、その懿旨が大変な権威をもって扱われた事は皇太后が下した指示に対し、廷臣たちもそれを尊重する姿勢を取っている事からも窺えよう。

では皇帝権力が極端に強まった明代において、皇帝権力は皇太后という存在にどのように作用したのだろうか。

慈寿皇太后は皇帝・皇位継承者の両者が不在という皇位継承問題と、それに付随する政治的空白期間、そしてその後に発生した大礼の議に関わり、そのなかで懿旨を発してきた。その慈寿皇太后を通して、明代の皇太后の権威について考えてみたい。

第一章 正徳帝の崩御

(一) 慈寿皇太后

まずは嘉靖帝にまつわる皇位継承問題と大礼の議、これらの問題に関わった慈寿皇太后とはどのような人物だったのか。

慈寿皇太后張氏は弘治帝皇后であり、その次に即位した正徳帝の生母である。子の正徳帝即位とともに皇太后となり、さらに正徳五年（一五一〇）には尊号を加えられて、慈寿皇太后と呼ばれるようになった。⁽³⁾

皇太后には二つのタイプがある。一つ目は先帝の皇后、二つ目は新皇帝の生母（聖母）である。前者は間違いなく皇太后となるのに対し、後者はもともと先帝の妃であり、その子（庶子）が即位して初めて皇太后として尊ばれる。この聖母という称号は嘉靖帝即位後に問題となるが、それは後述する。

さて皇后が子を生んだ場合、その子（嫡子）は優先的に即位するため、皇后が聖母という事もある。実は慈寿皇太后はまさにこの例に当たる。

正徳帝は皇后の子、嫡子でそれも長子であり、まさしく嫡出主義を取る明代の皇位継承の条件を備えて即位した皇帝であった。⁽⁴⁾嫡出主義を取っているならば本来こうなるのは当然と思われるが、趙翼が指摘しているようにこうした例は非常に少なく、厳密な意味では正徳帝のみである。⁽⁵⁾しかし皮肉な事にその正徳帝が嫡子どころか、後継者を一人も残さずに正徳十六年（一五二一）三月に崩御してしまう。⁽⁶⁾

更に正徳帝には兄弟もいなかった。⁽⁷⁾皇帝も皇位継承者もないという事態に、慈寿皇太后はいくつかの懿旨を発し、それは廷臣たちも従うところとなっている。つまり皇帝不在期間において慈寿皇太后は皇帝の母として、皇帝代理の機能をしていたと言えよう。

では皇帝及び皇位継承者不在期間において、具体的に慈寿皇太后の懿旨はどのような影響力を持ったのだろうか。

（二）嘉靖帝の即位事情

明代における初の皇位継承問題は、幼帝であった正統帝即位時である。初の幼帝を戴く事に動揺した廷臣たちを抑え、その後の体制作りに貢献したのは当時の太皇太后であった洪熙帝皇后張氏であった。⁽⁸⁾

中国歴代王朝でも皇位継承者を皇太后が決定するのは、珍しい事ではない。⁽⁹⁾しかし明代では皇帝権力が強化され、后妃の権力保持を防ぐ一環として后妃は民間から選ばれる事が原則であり、外戚に権力を求める事など不可能であった。⁽¹⁰⁾そんな明代の皇太后が朝廷に影響力を持つとするならば、それはどこから来るものなのか。

まず慈寿皇太后が直面した、正徳帝崩御に伴う皇位継承問題における彼女の動きを追っていききたい。

先述のように正徳帝は、正徳十六年（一五二一）三月丙寅に崩御した。その前日に正徳帝は大漸し、皇太后に内閣とともに天下の重大事を審議して決めるよう、伝えている。^⑪慈寿皇太后は正徳帝の遺詔を受けた、つまり皇帝の命令で遺詔の実行者として初めて発言権を認められたと考えられるのである。今回の例は逆に言うならば、皇帝や皇位継承者になんらかの問題がある時にのみ、皇太后とその命令である懿旨は遺詔によって權威を持ったと言える。

では、慈寿皇太后が内閣とともに審議する天下の重大事とは何か。

まずなされたのは、後継者の決定である。正徳帝崩御の前日の時点では、実は後継者は指名されていない。しかし発せられた遺詔では、新たに後継者に興王を指名する事が加わっていた。^⑫

興王とは何者なのか、なぜ彼が指名されたのであろうか。

遺詔では指名の理由として、先述の『皇明祖訓』の「必ず兄終われば弟に及ぶ（必兄終弟及）」が挙げられている。^⑬実際正徳帝に子も兄弟もない以上、先代弘治帝の兄弟、つまり成化帝の子世代にお鉢が回る事になる。興王の父朱祐杭（興献王）は成化帝第四子で、成化帝第三子の弘治帝のすぐ下の異母弟であり、順としては彼になるが正徳十四年（一五一九）に逝去していたため、その子の興王が指名されたと考えられる。

ただ遺詔では『皇明祖訓』のもう一つの規定である嫡出主義については、言及されていない。これは興王の父朱祐杭が成化帝貴妃の子、つまり嫡子ではない事に起因すると思われる。これは後に興王自身が即位後に父の嫡子化に努めている事からも明白なのだが、それについてはまた後述する。

遺詔では、わざわざ『皇明祖訓』を持ち出して後継者を指名しているが、これは即位の正当性を根拠付ける行為と言う事もできる。正徳帝は崩御前日まで後継者を指名していなかったし、正徳帝が遺詔を自ら起草したとは考えにくい。つまり、遺詔を起草し正当化を行った人物が存在する事になる。

その人物は、当時の内閣の首班であつた楊廷和であろう。これは遺詔の起草が楊廷和によるものである事が『明史』から窺えるためである。⁽¹⁴⁾そして遺詔が発せられると慈寿皇太后は即懿旨を内閣に発し、実行を促がしている。皇太后が内閣とともに重大事を決定する、これは遺詔に沿つた形のように見えるが、国家の重大事に加われない事を吏部尚書王瓊が嘆いている様子から、この決定は楊廷和とその周辺の一部の人間によつて行われた事が知れよう。⁽¹⁵⁾

こうして見ると内閣、特に楊廷和が全てを決定していたようだが、では遺詔で内閣とともに天下の重大事を任された慈寿皇太后はどうであつたのか。

まず基本的な規定として皇太后、つまり后妃は『皇明祖訓』において国政を預かる事も、大臣たちとの接見も許されない⁽¹⁶⁾とされている。しかしこれはあくまで規定であり、破る人間が出てきてもおかしくないのだが、慈寿皇太后が後宮から外に出て指示を行つたといつたような記述も見当たらない事から、原則を遵守していたと思われる。そうすると慈寿皇太后が内閣とともに審議すると言っても、実際は内閣、楊廷和の意見を慈寿皇太后が追認する形式であつたと考えられる。

以上から楊廷和が独断専行できたようにも見えるかもしれないが、実はそうではない。吏部尚書王瓊が嘆いたように、楊廷和のやり方に廷臣たちの反発があつた事が窺える。しかし楊廷和が起草した遺詔について、廷臣たちが異議申し立てや反対姿勢をとつた様子は見られない。それには遺詔に、わざわざ慈寿皇太后の命令である懿旨が付随した事がポイントになるのではないだろうか。

本来ならば皇帝権力が強い明代の皇帝の遺詔に、政治への介入を厳しく禁じられている皇太后の懿旨が付随する事は、不自然としか言いがたい。しかし正徳帝の遺詔によつて慈寿皇太后は遺詔の代行者として機能する事になつたと考えると、先帝の遺詔の実行には代行者の命令が不可欠であり、遺詔と懿旨は表裏一体の関係であると言える。

つまり楊廷和の意見を追認する慈寿皇太后の懿旨は、楊廷和の言動を權威付けするものとして機能したと言えよう。しかしこれは裏を返すと、楊廷和は慈寿皇太后の懿旨を受けてこそ正当性が得られるわけであり、懿旨抜きに勝手をでるものではなかった事を意味しているよう。

このように遺詔にある皇太后と内閣の合議の上で、とはいかないものの、内閣の意見に權威という裏打ちを与える立場で慈寿皇太后は内閣と結びつき、後継者も決定し朝廷は安定に向かうように見えた。

ただ問題がなかったわけではない。興王が当時は安陸（今の湖北省）の王府におり、京師にいなかった。そこで遺詔と懿旨を持った使者が早々に京師を発ったが、正徳帝崩御から興王即位までの皇帝不在期間は約四十日間と長期間に及んだのである。

その間、慈寿皇太后も廷臣たちも何もしていなかったわけではない。正徳帝崩御から四日後には正徳帝時代の奸臣たちが獄に下されるが、それは内閣ではなく慈寿皇太后の懿旨によるものであった。¹⁷正徳時代の旧弊を払う命令が慈寿皇太后によって出された事は、新皇帝の到着までに慈寿皇太后が新しい体制を作り直しに努めていた一環と言えよう。

こうして皇太后も廷臣たちも新皇帝を迎える用意を万端整え、興王も安陸を出発し、四月に京城外に到着した。しかしここでまた問題が生じる。しかも興王と廷臣たちとの間にであり、後の大札の議に通じるものであった。

事の発端は、礼部が提示した即位手順である。それは皇太子即位の礼、つまり皇城の東にある東安門より入って文華殿に至り、翌日臣下から三回の箋勸進を受けるというものであった。これについて『明史紀事本末』からは、楊廷和の意見が多分に含まれている事もまた窺い知れる。¹⁸

こうした即位手順は、京師に向かっている道中の興王の元に届けられたが、興王はすでに自分は皇帝であるとして、それをはねつけたのである。¹⁹この話は決着を見ないまま、興王一行は京城外に達し、臨時の御座所である行殿に至って

しまう。事ここに至って、楊廷和も説得に当たったものの興王が主張を曲げる事はなかった。⁽²⁰⁾ この後興王は即位して嘉靖帝となっても、自分の生父母の扱いについて廷臣たちと争う事になるが、その前段階から自身への正統な皇帝としての扱いを廷臣たちに求めている事がわかる。

この双方が主張を曲げない状況を打開すべく、動いたのは慈寿皇太后であつた。彼女は懿旨を発し、皇帝位が長く空位である事を憂い、後継者が到着したのだから速やかに即位させるよう促がした。この仲裁により、興王は即位し嘉靖帝となつたのである。⁽²¹⁾

慈寿皇太后の懿旨は、それまで楊廷和の意見によつて発せられた事から考えると、この仲裁も要請があつたのだろう。しかし内容は興王の意見を尊重するものとなっており、正徳帝崩御直後は楊廷和の意見を追認する形式を取つていた事を考えると、様相が異なつてきているように見える。では彼女の意図するものは何だつたのか。

先述したように、慈寿皇太后には積極的に政治に介入しようとした形跡は見当たらない。これは明代で初めて皇位継承問題に直面した、洪熙帝皇后張氏も同じであり、一貫して朝廷や皇統の安定にのみ力を尽くしているのが特徴である。⁽²²⁾ こうした先例とともに考えると、慈寿皇太后は正徳帝崩御前後には廷臣の意見、興王即位前には興王の意見を採りし、一貫性がないように見えるが、少なくとも朝廷の安定という至上命題は果たしたと言えるのではないだろうか。

ともあれ、慈寿皇太后の仲裁によつて新皇帝嘉靖帝は即位した。しかし即位手順で採めたように、嘉靖帝は自分自身と更には父母の扱いについて強いこだわりを見せている。皇帝のこうした意思がすんなりと通らなかつたのは、嘉靖帝の傍系からの即位という立場や正当性の弱さが背景にある。そのため嘉靖帝は即位の正当性は、正徳帝の遺詔と慈寿皇太后の懿旨に依る事になり、慈寿皇太后の權威が重要な鍵を握つていたと言える。

では嘉靖帝即位後、慈寿皇太后の懿旨はどのように扱われていくのだろうか。

第二章 嘉靖年間初頭の動向

(一) 大札の議の端緒

慈寿皇太后の仲裁で、興王は即位し嘉靖帝となった。

先述のように、慈寿皇太后は正徳帝の遺詔で内閣とともに天下の重大事を任されたが、遺詔の実行者である以上、慈寿皇太后の權威は新皇帝即位までの、期間限定のものと解釈できる。実質的には後継者決定から即位までは間が空いてしまったが、嘉靖帝が即位したからには、慈寿皇太后とその懿旨は大きな影響力を及ぼす事もなくなるはずである。

しかし嘉靖帝は傍流からの即位であり、その即位の最大の根拠は正徳帝の遺詔と慈寿皇太后の懿旨であり、嘉靖帝自身が即位の際にそう明言している。⁽²³⁾ 嘉靖帝の皇位継承の正統性は甚だ弱いと言わざるを得ない。逆に慈寿皇太后の懿旨は先帝の遺詔とともに即位の根拠となった事で、本来ならば新皇帝即位によりなくなるはずの慈寿皇太后の影響力は、嘉靖年間に入っても残ったとしても不思議ではない。

こうしたなかで嘉靖帝は即位後五日にして、亡父興献王の封号を礼部に検討させる命令を下した。⁽²⁴⁾ これが端緒となった大札の議は、嘉靖帝が生父母を皇帝の親として扱う事を求めたもので、家族問題が政治問題化したものとも言える。

嘉靖帝の血族で、嘉靖帝が即位した正徳十六年（一五二一）四月現在生存していたのは、生母で興献王妃の蒋氏と祖母で成化帝貴妃の邵氏のみ、つまり女性しかなかった。これはいきおい後宮の問題となり、当時その頂点にあった慈寿皇太后の立場に直結するものであったと理解できよう。

では大札の議を通して慈寿皇太后及びその懿旨の扱い、そして立場はどのように変化していったのだろうか。慈寿皇太后の動き、特に後宮に関するものを取り上げて見ていきたい。

まず動きがあったのは、嘉靖帝生母の蔣氏である。彼女は安陸にいたが、嘉靖帝は即位して三日後、つまり大礼の議が発生する直前に京師に呼び寄せる使者を發し、それを受けて蔣氏は十月に京師に到着した。⁽²⁵⁾

当時朝廷は嘉靖帝の亡父の封号をめぐる議論、大礼の議のまったなかにあった。礼部尚書毛澄たち、つまり楊廷和の意を受けた廷臣たちは嘉靖帝に弘治帝を父、慈寿皇太后を母、生父母を皇叔父・皇叔母と扱うよう主張したが、嘉靖帝はそれに難色を示し、まったく結着を見ない状態にあった。⁽²⁶⁾ 興献王の扱いに紛糾する中、蔣氏の扱いも当然議論となった。⁽²⁷⁾

こうした朝廷の動きは京師に向かっている蔣氏の耳にも届いた。蔣氏は我が子が他人の子とされる事に憤り入京を拒否し、嘉靖帝もそれを受けて皇帝位を退くと言いつつ出すまでに至つてしまふ。⁽²⁸⁾

この状況において嘉靖帝と廷臣たちの仲裁に入つたのは、やはり慈寿皇太后であつた。彼女が興献王を興献帝、蔣氏を興献后、更には嘉靖帝の祖母邵氏を皇太后とするよう懿旨を下し、これによつて蔣氏も入京し、嘉靖帝の生母や祖母の扱いに一応の解決がついたのである。⁽²⁹⁾

この仲裁は、またしても廷臣たちの要請によるものである事が『明史』から窺える。⁽³⁰⁾ つまりは即位時と同様、廷臣たちは嘉靖帝の主張に抵抗しきれず、慈寿皇太后に仲裁を頼んだ形であるが、逆に考えると慈寿皇太后の懿旨として出てきた提案に、嘉靖帝が妥協したとも言える。

そう考えると嘉靖帝といえども慈寿皇太后の命令は尊重せざるを得ず、また廷臣たちもそれをわかつた上で事の解決を図つてゐるという構図が見て取れるのである。嘉靖帝は即位直後の時点では、自らの主張を明確に表しつつ、廷臣たちの意見とある一定の妥協を図つていたか、もしくは図らざるを得なかつたかと考えられる。

それが証拠に、嘉靖元年（一五二二）三月に嘉靖帝は尊号を贈り、慈寿皇太后を昭聖慈寿皇太后、正徳帝皇后夏氏を

莊肅皇后としている。つまり嘉靖元年段階で嘉靖帝は、廷臣たちが主張したように弘治帝を皇考、慈寿皇太后を聖母として扱っているのである。⁽³¹⁾ その一方であれほどこだわった生父母の扱いは、本生父・本生母となつた。⁽³²⁾ 「皇」の字の使用が叶わなかつた事からも、嘉靖帝はかなりの譲歩を強いられたと見ていいだろう。⁽³³⁾

これは一見すると嘉靖帝の一方的な敗北のようにも見えるが、そうではない。実は嘉靖帝は慈寿皇太后に尊号を贈る一方で、祖母の邵氏を寿安皇太后としているが、これが非常に大きな成果なのである。⁽³⁴⁾

先述のように嘉靖帝の祖母邵氏は成化帝貴妃、つまりその子である興献王は成化帝の庶子なのである。これは『皇明祖訓』の規定である嫡出主義から考えると、嘉靖帝自身の即位の正当性に支障をきたしてしまう事になりかねない。つまり祖母を皇太后にする事は、取りも直さず嘉靖帝による父の嫡子化であり、自らの即位の正当性を高めるために、非常に重大な意味を持つものだったのである。⁽³⁵⁾

そのなかで、祖母への対応はもちろん生父母への尊号は、実は嘉靖帝の命令ではなく慈寿皇太后の懿旨によって行われている事、そして嘉靖帝がそれを理由に廷臣たちが出してくる反対意見を封じ込めている事は注目される。⁽³⁶⁾

嘉靖帝が自ら命令を下さなかつたのは、蒋氏入京の経緯から考えて、その延長線上にあるこの問題は、慈寿皇太后の懿旨を通じて行われるのが筋であつたからかもしれない。嘉靖帝がどこまで意図したかは不明であるが、少なくとも後の経過を見る限り嘉靖帝にとって慈寿皇太后の懿旨は、廷臣たちを黙らせるカードであり、嘉靖帝が妥協した一定のラインを守るための防衛手段として利用している向きが強いように思われる。

このように、慈寿皇太后の懿旨は嘉靖帝即位後も權威を持ち続けており、廷臣たちも嘉靖帝もそれを利用し、自己の主張を有利に運ぼうとしている事がわかるのである。

(二) 慈寿皇太后の動き

では嘉靖帝及び廷臣たちの間で、その權威を保ち続けている慈寿皇太后であるが、彼女自身の意図はどうだったのか。それを明確に示すものはない。だが慈寿皇太后が自主的に行ったと思われる行動として、蔣氏を藩王妃として対応していた事、嘉靖帝の皇后選定の懿旨を出している事が挙げられる。

まず慈寿皇太后の蔣氏への対応は、慈寿皇太后が蔣氏を皇帝の母として認めないという態度を露骨に表したものであり、これはまた慈寿皇太后を頂点とする後宮内の対応も同様であったと言えよう。嘉靖帝は非常に不愉快であったようである。⁽³⁷⁾

実はこの皇帝の母という立場の問題の延長線上にあるのが、嘉靖帝の皇后選定であった。皇后選定は、明代初めての皇太后であつた洪熙帝皇后張氏より、皇太后や太皇太后が行う事が通例となつたようである。⁽³⁸⁾

慈寿皇太后は嘉靖元年（一五二二）正月に皇后選定の命令を発している。⁽³⁹⁾そして同年八月に皇后選定が行われる事になったのだが、ここに来て嘉靖帝祖母の寿安皇太后の命令に従うように、という旨が内閣に伝えられた。これについて楊廷和は聖母、つまり慈寿皇太后の命令によって行われる事を理由に拒否している。⁽⁴⁰⁾

一体いかなる経緯で、皇后選定の主導権が慈寿皇太后から寿安皇太后に移る事になったのかは不明であるが、蔣氏の問題も含め、これらは名目上皇帝の聖母である慈寿皇太后と、血筋的に皇帝の祖母や母である皇太后との対立、ひいては後宮内での優位を争う構図と見て取る事ができよう。つまり、大札の議は嘉靖帝が生父母を皇帝の親として扱うよう求めた事に始まり、皇帝と廷臣たちの対立でもって語られるが、後宮内での権力争いという面もあったのである。

嘉靖元年（一五二二）の時点では、後宮内の対立は聖母である慈寿皇太后に軍配が上がったように、廷臣たちが自分たちの意見の後ろ盾として、慈寿皇太后の懿旨を持ち出し、嘉靖帝も自分の即位の正統性の裏付け、生母や祖母の扱い

の理由を慈寿皇太后の懿旨に求め、廷臣たちの反対を封じるといふ動きを見せており、慈寿皇太后と懿旨は大きな權威を持つてゐる事がわかる。しかし本来これは嘉靖帝即位と同時に失われるはずのものであるが、それにもかかわらず權威は保持された。その大きな要因は、他ならぬ嘉靖帝自身であつたと言えよう。

こうして終息したように見えた大礼の議は、嘉靖三年（一五二四）再び紛糾する事になる。ではそのなかで、慈寿皇太后とその懿旨の權威はどのように変化していったのであろうか。

第三章 大礼の議の決着と慈寿皇太后

（一）聖母から皇伯母へ

嘉靖元年（一五二二）の段階で嘉靖帝は弘治帝を皇考、慈寿皇太后を聖母、実の両親を本生父母、祖母を寿安皇太后とし、大礼の議は一応の決着を見た。実の両親を皇帝の親として扱う事を一貫して要求していた嘉靖帝とするならば、これは妥協した形であつた。

妥協しなければならなかつた要因の一つとして、嘉靖帝自身の皇位繼承への根柢の薄さがある。しかしすでに皇帝として即位した事實は嘉靖帝の強みであり、時間の経過とともに嘉靖帝自身に權威がつくとともに、彼の意見に賛同する廷臣たちが台頭してくるのは当然の事である。これはそれまで頼つてきた慈寿皇太后の權威を必要としなくなる事につながると思へる。

こうした動きが見えるのは嘉靖三年（一五二四）である。

この年の正月、嘉靖帝の意見を支持する廷臣たちが、改めて嘉靖帝の生父母を皇考・聖母とするべきとする上奏を行つたのである。⁽⁴⁾ こうした廷臣たちは、即位直後からさかんに上疏を行つていたが、楊廷和に抑え込まれていた。しか

しその楊廷和が、翌月に辞職したのである。⁽⁴²⁾

嘉靖帝及び廷臣たちを掣肘してきた大きな人物がいなくなり、時勢は嘉靖帝に傾きつつあった。

まず同年三月に嘉靖帝は勅を下し、慈寿皇太后に尊号を加えている。⁽⁴³⁾そして同日に亡父興献帝を本生皇考恭穆献皇帝、生母興献太后を本生聖母章聖皇太后とするに至るも、それはこれまで同様に慈寿皇太后の懿旨によって行われる形が取られているし、慈寿皇太后の聖母の扱いも続行されている。⁽⁴⁴⁾

つまりこの時点で嘉靖帝の慈寿皇太后を尊重する姿勢に変化はなく、それまでと同様に懿旨によって亡父に皇帝、生母に聖母及び皇太后の文言を使用する事に成功し、段階的に自分の欲するところに着実に近づけている様子が窺える。

しかしこれが弾みになった嘉靖帝は、早くも同年七月には章聖皇太后の「本生」の字を削る命令、つまり本格的に生母蒋氏を聖母として正式に扱うという、当初から望みを実行に移したのである。⁽⁴⁵⁾

当然のことながら朝廷は紛糾し、嘉靖帝に反対する廷臣たちは左順門の前で哭し、反対を訴えた。これは成化帝時代⁽⁴⁶⁾の故事にのっとったものであり、廷臣たちにしてみれば皇帝の意見を覆す最後の手段であつたろう。しかしこれは逆に嘉靖帝の怒りを買ひ、反対する廷臣たちを嘉靖帝は獄に下し、言わば肅清する形で決着をつけたのである。⁽⁴⁷⁾

やがて反対勢力がいなくなった同年九月、慈寿皇太后は皇伯母、章聖皇太后は聖母となり、ここに嘉靖帝が望んだ形が完成した。⁽⁴⁸⁾

では、こうした変化はどのような意味があつたのであろうか。

(二) 慈寿皇太后の權威の変化

嘉靖三年（一五二四）九月の命令とそれまでのものとの決定的違いは、嘉靖帝自らが命を下している点にある。

嘉靖三年九月以前、つまり即位後から嘉靖三年三月までの間、生父母や祖母に関する命令は、先述のように全て慈寿皇太后の懿旨という形で出されてきた。つまり嘉靖帝自らが命令を下した嘉靖三年九月の変化は、嘉靖帝が慈寿皇太后の懿旨の權威を必要としなくなった、嘉靖帝自身の權威がそれだけ高まったという事であろう。

嘉靖帝はそれまで、慈寿皇太后の懿旨がある事を理由に廷臣たちの反論を封じ込めてきた経緯がある。しかし嘉靖三年九月の段階で反対派の廷臣たちは一掃されており、嘉靖帝が思うように動けるようになった事も大きいと考えられる。こうした一連の動きは慈寿皇太后の權威が下がるというよりは、本来ならば即位と同時に嘉靖帝が持つはずだったものを取り戻した、と言う方が正しいのかもしれない。

慈寿皇太后の懿旨が權威を持ったのは、正徳帝の遺詔によって遺詔の実行者として、新皇帝即位までの間の事を任されたからである。

そもそもなぜ慈寿皇太后に任されたのか。まず皇帝権力の強化によって明代において遺詔の代行者、即位根拠になるほどの權威を持つ存在を臣下が務める事は不可能であった。皇帝と同等の存在などありえない、しかし見方を変えたと皇太后は皇帝の尊属、つまり家族関係に限定すると皇帝の上位に立つ唯一の人物なのである。君臣関係しか存在しない朝廷に皇太后が影響するという構図は、君臣の秩序の上に家族のそれが優先される形と言える。異常事態であるが、これは皇帝不在という緊急時だからこそ、そして新皇帝即位までの短期間とわかっているからこそ、行い得る措置であったと思われる。

正徳帝は崩御直前、家族秩序でもって慈寿皇太后を權威付けし、君臣関係で成り立っている朝廷に影響力を持たせる事で緊急避難的措置を取った。そして廷臣たちもその非常手段を利用し、そして即位根拠の薄い嘉靖帝も本来自らの即位で失われるはずの慈寿皇太后と懿旨の權威でもって、自らの後ろ盾や家族への尊号といったものを手に入れていった。

皇帝と廷臣、ともに君臣と家族両方の理屈でもってバランスを図っている構図が浮かび上がってくるのである。慈寿皇太后の懿旨が廷臣たちを動かし、嘉靖帝の即位根拠になり、また廷臣たちの反対意見を押さえ込む事ができたのは、嘉靖帝と廷臣たちが同じ論理を利用している証拠であろう。

大礼の議は嘉靖帝の生父母や祖母の扱い、つまり嘉靖帝の家族の扱いをめぐる紛議であった。しかし一方でもう一つの家族、慈寿皇太后の權威にからむ問題でもあった。大礼の議は家族秩序で成り立つ慈寿皇太后の權威から脱却し、本来嘉靖帝が即位と同時に持つはずであった權威と君臣秩序を取り戻す、そういう過程でもあったと言えるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、明代の皇太后が朝廷に与えた影響力を見るため、正徳帝崩御や大礼の議といった大きな事件に関わった慈寿皇太后について検討を加えた。

慈寿皇太后は正徳帝崩御の際、内閣とともに天下の重大事を任された存在であった。慈寿皇太后は遺詔の代行者として、皇帝も皇位継承者も不在であった約四十日という長期間、内閣の後ろ盾として大きな影響力を持った。

慈寿皇太后は遺詔によって權威を得た。これは皇帝を頂点とする君臣関係にある朝廷に、遺詔の代行者や皇帝代理は存在し得ない事から、皇帝の家族関係で尊属の皇太后を皇帝も廷臣たちも、緊急事態を乗り切るために持ち出したためである。

慈寿皇太后は正徳帝崩御後、内閣、特に楊廷和とともに後継者を決定し、新皇帝即位までの道筋をつけている。慈寿皇太后は自ら朝廷の場に立つような事はなかったが、嘉靖帝と廷臣たちの調停役になる等、明代の先達の皇太后たち同

様、皇統と朝廷の安定を保つ働きにとめている。

こうして迎えられた嘉靖帝は即位後まもなく、生父母の扱いから大札の議を起こした。嘉靖帝の意向は廷臣たちの反対から、妥協せざるを得ない所が多分にありつつも、一定の成果は挙げていた。特に祖母を皇太后にする事で亡父の嫡子化に成功したのは、明代の皇位継承の原則に照らしても重要かつ必要な事であつたし、それはとりもなおさず自らの即位と皇統の正当化に繋がるものであつた。

ただしこれは嘉靖帝の命令ではなく慈寿皇太后の懿旨によって、という形が取られた。嘉靖帝のこうした行動は、傍系からの即位という事実起因するものである。嘉靖帝は慈寿皇太后の權威に頼るところが多分にあり、嘉靖帝が即位してなくなるはずの慈寿皇太后の權威は、保持され続ける事になつたのである。

しかし嘉靖三年（一五二四）になると、それまで嘉靖帝を牽制してきた楊廷和が辞職し、嘉靖帝の意見に賛同する廷臣たちが台頭してきた事も手伝い、状況は変化した。結果、聖母としてきた慈寿皇太后を皇伯母、実母を聖母として扱うに至つた。

嘉靖三年の命令は、嘉靖帝自身が発している事が特徴的である。これは嘉靖帝が本来即位と同時に手にするはずであつた權威をようやく取り戻し、慈寿皇太后の權威、つまり家族関係の權威から脱却した事を意味しているよう。大札の議は嘉靖帝の生父母の扱い、家族をめぐる紛議であつたが、その終わりはもう一つの家族の問題である慈寿皇太后の權威からの脱却という側面もあつたのである。

本稿では明代の後妃たちが及ぼした影響を見る例として慈寿皇太后を扱つたが、それ以降明代に皇位継承に関わる問題が起きなかつたわけではない。むしろ明末は三案と呼ばれる争議も起こっているくらいである。実はその際皇太后が不在であつたのだが、それはどのような影響や問題を生じさせたのであろうか。明末の後宮にかかわる諸問題について

註

(1) 『皇明祖訓』法律。

凡朝廷無皇子、必兄終弟及。須立嫡母所生者、庶母所生雖長不得立。若姦臣棄嫡立庶、庶者必當守分勿動。遣信報嫡之当立者、務以嫡臨君位、朝廷應即斬姦臣。

(2) 『國權』卷二十三。

宣德十年正月……乙亥、宣宗賓天。皇太子年九歲、皇太后取金符入內、或謂立襄王。太后聞之、立至乾清宮、携太子召閣臣泣曰、此新天子也。閣臣伏謁呼万歲、群臣隨之、浮議乃息。

(3) 『明史』卷百十四、后妃二。

孝宗孝康皇后張氏……成化二十三年選為太子妃。是年、孝宗即位、冊立為皇后。……武宗即位、尊為皇太后。五年十二月以眞鐸平、上尊号曰慈壽皇太后。

(4) 『明史』卷十六、武宗。

武宗承天達道英肅睿哲昭德顯功弘文思孝毅皇帝、諱厚照、孝宗長子也。母孝康敬皇后。

(5) 『廿二史劄記』卷三十二、明正后所生太子。

(6) 『明武宗實錄』正德十六年三月丙寅。

上崩于豹房。先一夕上大漸、惟太監陳敬・蘇進二人在左右、乃謂之曰、朕疾殆不可為矣。爾等与張銳可召司礼監官來、以朕意達皇太后、天下事重、其与内閣輔臣議處之。前此事皆由朕而悞、非汝衆人所能与也。俄而上崩。敬・進奔告慈寿皇太后、乃移殯于大内。是日伝遺旨、諭内外文武群臣曰、朕疾彌留、儲嗣未建、朕皇考親弟興獻王長子厚熹、年已長成、賢明仁孝、倫序当立。已遵奉祖訓兄終弟及之文、告于宗廟、請于慈寿皇太后、即日遣官迎取來京、嗣皇帝位、奉祀宗廟、君臨天下。又伝慈寿皇太后懿旨、諭群臣曰、皇帝寢疾、彌留已迎取興獻王長子厚熹、來京嗣皇帝位。一応事務、俱待嗣君、至日處分。於是司礼等監太監谷大用・韋霽・張錦・内閣大学士梁儲・定国公徐光祚・駙馬都尉崔元・礼部尚書毛澄奉金符、以行初司礼監官、以太后命至内閣与大学士楊廷和等議所、当立者既定、入白太后取旨、廷和等候於左順門。頃之吏部尚書王瓊排掖門入厲声曰、此豈小事、而我九卿顧不預聞耶。衆不答、瓊意乃沮。

(7) 慈寿皇太后の子、つまり正徳帝の弟がいたが夭逝している。『明史』卷百十九、諸王四。

孝宗二子。武宗・蔚王厚煒、俱張皇后生。

蔚王厚煒、孝宗次子、生三歳薨。追加封諡。

(8) 拙稿「明朝の皇位継承問題と皇太后―誠孝皇后張氏を例に―」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第九号、

二〇一〇年。

(9) 谷口やすよ「漢代の皇后権」『史学雑誌』第八十七編第十一号、一九七八年。秦玲子「宋代の后と帝嗣決定権」『柳田節

子先生古希記念 中国の伝統社会と家族』汲古書院、一九九三年。

(10) 拙稿「明代後宮と后妃・女官制度」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第八号、二〇〇九年。

(11) 『明武宗実録』卷百九十七、正徳十六年三月丙寅。

上崩于豹房。先一夕上大漸、惟太監陳敬・蘇進二人在左右、乃謂之曰、朕疾殆不可為矣。爾等与張銳可召司礼監官來、

以朕意達皇太后、天下事重、其與內閣輔臣議處之。前此事皆由朕而悞、非汝衆人所能與也。俄而上崩。敬・進奔告慈壽皇太后、乃移殯于大內。

(12) 『皇明詔令』卷十八。『明武宗實錄』正德十六年三月戊辰に同じ。

詔曰、朕以菲薄、紹承祖宗丕業十有七年矣。國治雖勤、化理未洽、深惟先帝付託。今忽遭疾彌留、殆弗能興。夫死生常理、古今人所不免、惟在繼統得人、宗社生民有賴、吾雖棄世亦復奚憾焉。皇考孝宗敬皇帝親弟興獻王長子厚熹、聰明仁孝、德器夙成、倫序當立。已遵奉『祖訓』「兄終弟及」之文、告于宗廟、請于慈壽皇太后與內外文武群臣合謀同辭、即日遣官迎取來京、嗣皇帝位。內外文武群臣、其協心輔理、凡一應事務、率依祖宗旧制、用副予志。嗣君未到京之日、凡有大緊急事情、該衙門具本、暫且奏知皇太后。

(13) 注(1)に同じ。

(14) 『明史』卷百九十、楊廷和。

先是、武宗崩、廷和草遺詔。

三月十四日丙寅、谷大用・張永至閣、言帝崩於豹房、以皇太后命乃移殯大內、且議所當立。廷和奉皇明祖訓示之曰、兄終弟及、誰能洩焉。興獻王長子、憲宗之孫、孝宗之從子、大行皇帝之從弟、序當立。……乃令中官入啓皇太后、廷和等候左順門下。頃之、中官奉遺詔及太后懿旨、宣諭群臣、一如廷和請、事乃定。

(15) 注(6)に同じ。

(16) 『皇明祖訓』內令。

凡皇后止許內治宮中諸等婦女人、宮門外一應事務毋得干預。
凡宮闈當謹內外、后妃不許群臣謁見。

(17) 『明武宗実録』 正德十六年三月庚午。

皇太后懿旨下、江彬・神周・李琮于獄。

(18) 『明史紀事本末』 卷五十、大礼議。

(正德十六年四月) 丁卯、礼部員外郎楊応魁上礼儀狀。請由東安門入居文華殿、翌日百官三上箋勸進、俟令旨俞允、即日即位。大学士楊廷和命儀部郎中余才所擬也。

(19) 『明世宗実録』 正德十六年四月癸卯。

至京城外、駐蹕行殿。初礼部具儀、請如皇太子即位礼。上覽之、謂長史袁宗臯曰、遺詔以吾嗣皇帝位。非皇子也。至是大学士楊廷和等請上、如礼部所具儀、由東安門入居文華殿、上箋勸進、扨日登極、上不允。会慈寿皇太后有旨曰、天位不可久虚嗣君、已至行殿。内外文武百官、可即日上箋勸進。於是上遂從行殿、受箋文武百官軍民耆老人等。

(20) 注 (19) に同じ。

(21) 注 (19) に同じ。

(22) 注 (8) に同じ。

(23) 『皇明詔令』 卷十九。即位詔、正德十六年四月二十二日。

奉天承運皇帝詔曰、朕承皇天之眷命、頼列聖之洪休、奉慈寿皇太后之懿旨、皇兄大行皇帝之遺詔、属以倫序、入奉宗祧。

(24) 『明世宗実録』 正德十六年四月戊申「命礼部会官議興献王主祀及封号以聞。」

(25) 『明世宗実録』 正德十六年十月壬午。

聖母至京、由大明中門入。上候迎午門、内入見奉先殿・奉慈殿。

(26) 『明世宗実録』 正德十六年五月戊午。

禮部尚書毛澄等會議興獻王主祀及称号、奏曰、考之漢成帝立定陶王為皇太子、立楚孝王孫景為定陶王、奉共王祀、共王皇太子本生父也。時大司空師丹以為恩義備至。今皇上入繼大統、宜如定陶王故事、以益王第二子崇仁王厚炫繼興獻王、後襲封興王主祀事、又考之宋濮安懿王之子入繼仁宗、後是為英宗。宰臣請下有司議禮特知諫院司馬光謂、濮王宜尊以高官大爵稱皇伯、而不名判。太常寺范鎮亦言、陛下既考仁宗、若復以濮王為考、於義未當、乃詔立濮王園廟、以宗樸為濮國公、奉濮王祀。程頤之言曰、為人後者謂所後為父母、而謂所生為伯叔父母、此生人之大倫也。然所生之義至尊至大、宜別立殊稱曰皇伯叔父、某國大王則正統既明、而在所生亦尊崇極矣。今興獻王於孝宗為弟於皇上為本生父、與濮安懿王事正相等、皇上宜稱孝宗為皇考、改稱興獻王為皇叔父興獻大王、興獻王妃為皇叔母興獻王妃、凡祭告興獻王妃、皇上俱自稱姪皇帝、則隆重正統與尊崇本生恩禮備至、可以為万世法。疏入上曰、藩府主祀及称号事体重大、再會議以聞。

(27) 『明史』卷百十五、睿宗興獻皇帝。

合妃將至、禮臣上入宮儀、由崇文門入東安門、皇帝迎於東華門。不許。再議由正陽門入大明·承天·端門、從王門入宮。又不許。王門、諸王所出入門也。勅曰、聖母至、御太后車服、從御道入、朝太廟。故事、后妃無謁廟禮、禮臣難之。

(28) 『明史』卷百十五、睿宗興獻皇帝。

時妃至通州、聞考孝宗、恚曰、安得以吾子為他人子。留不進。帝涕泣願避位。

(29) 『明世宗實錄』正德十六年十月庚辰。

上曰、卿等累次會議正統之大義、本生之大倫、考摭精詳議擬允當朕已知之、欽奉慈壽皇太后之命、以朕既承大統、父興獻王宜稱興獻帝、母興獻后、憲廟貴妃邵氏為皇太后。朕辭之再三不容、遜避特論、卿等知之。

(30) 『明史』卷百十五、睿宗興獻皇帝。「群臣以慈壽皇太后命、改稱興獻妃、乃入。」

(31) 『明世宗實錄』嘉靖元年三月丁巳。

以上昭聖慈寿皇太后・莊肅皇后尊号、遣定国公徐光祚・武定侯郭勛・惠安伯張偉祭告天地・宗廟・社稷。

(32) 『明世宗実録』嘉靖元年三月壬戌。

上御奉天殿頒詔曰、……謹奉冊宝、上聖母尊号曰昭聖慈寿皇太后、皇嫂曰莊肅皇后。又奉聖母懿旨、上聖祖母尊号曰寿安皇太后、本生父母曰興猷帝・興国太后。

(33) 『明史』卷百九十、楊廷和。

帝不得已、乃以嘉靖元年詔称孝宗為皇考、慈寿皇太后為聖母、興猷帝・后為本生父母、不称皇。

(34) 注(32)に同じ。

(35) 中山八郎「再び「嘉靖朝の大札問題の発端」に就いて」『中山八郎 明清論集』汲古書院、一九九五年。

(36) 『明世宗実録』正徳十六年十二月乙巳。

吏部等衙門尚書喬宇・孫交・鄭宗仁・毛澄・彭澤・俞琳、侍郎羅欽順・秦金・鄒文盛・賈詠・汪俊・李鉞・顏熙寿・臧鳳・童瑞・陳雍、都御史金猷民・劉玉通・政柴義・張瓊安・金參議・陳霽・陳卿・万鏜・周倫・張籍、寺丞張璠・劉源清連名具疏奏、興猷帝不宜称皇号。言正統大義、惟賴皇字以明、若加于本生之親、則与正統混而無別揆之、天理則不合、驗之人心、有未安非所以重宗廟正名分也。上曰、慈寿皇太后懿旨有論、今皇帝婚禮已命行其興猷帝、宜加与皇号母興猷皇太后。朕不敢辞、爾群臣其承命。礼部尚書毛澄等復奏曰、皇上考孝廟・母慈寿、本生之親既尊為帝后、而又欲於帝后之上有加則於正統之親無別恐不可以告郊廟、而布之天下也。内閣大臣尽忠竭誠、直言規諫、乞降俞。上曰、懿旨論及不可違、宜承休命。

(37) 『明史』卷百十四、后妃二。「初、興国太后以藩妃入、太后猶以故事遇之、帝頗不悅。」

(38) 最初の例としては、正統帝の皇后選びを太皇太后が行ったもの。

『明英宗實錄』正統六年春正月乙卯。

太皇太后勅諭行在禮部尚書胡濙等曰、皇帝婚期伊邇皇后之位必在得賢、蓋以上配宸嚴祇奉宗廟、表正六宮母儀天下、而隆國家万世之本也。爾禮部其榜諭北京·直隸·南京·鳳陽·淮安·徐州·河南·山東·陝西於大小官員民庶有德之家、用誠簡求務摺、其父母克修仁義家法、齊肅女子年十三至十五、容貌端潔、性資純美、言動恭和、咸中禮度者、有司以禮、令其父母親送赴京、吾將親閱焉。

(39) 『明世宗實錄』嘉靖元年正月癸亥。

禮部奏奉皇太后懿旨、選后請命司禮監摺公正、內臣分道選求、從之。

(40) 『明世宗實錄』嘉靖元年八月丙子。

昭聖慈壽皇太后懿旨、大婚選到女子、宜進宮簡選。欽天監其昃日以聞。先是司禮監官佞諭內閣、以大婚禮取到女子赴宮簡選、欲從壽安皇太后佞旨。大學士楊廷和等再疏、言其不可云、去年宣諭禮部舉行、今春分遣司禮監官選取、皆由聖母昭聖慈壽皇太后詰諭、在廷之臣与天下之人皆知之。今日佞旨改從壽安事、不婦一礼、不由正何以昭示中外、乃佞奉昭聖懿旨行之。

(41) 『明世宗實錄』嘉靖三年春正月丙戌。

南京刑部主事桂萼上正大礼疏、其略曰、臣聞古者帝王、事父孝故事天明、事母孝故事地察、未聞廢父子之倫、而能事天地主百神者也。今礼官以皇上与為人從而強附末世故事、滅武宗之統、奪興獻帝之宗、識者咸心知其非、而未聞有所規納者何也。蓋自張璁·霍輅上議論者、指為干進故達理者、不敢挾論其誤、遂因循至今日耳、然是失也。綱常所關誠非細、故切念皇上在興國太后之惻慨、興獻帝弗祀三年矣。而臣子乃肆然自以為是豈一体之義乎。臣願皇上速發明詔循名考實称孝宗曰皇伯考、武宗曰皇兄、興獻帝曰皇考、而別立廟於大內。興國太后曰聖母、則天下之為父子君臣者、定

至於朝議之謬、有不足弁者何也。彼所執不過宋濮王議、且臣按宋臣范純仁告英宗曰、陛下昨受仁宗詔親許為仁宗子、至於封爵悉用皇子故事、與人繼之主事体不用、則宋臣之論亦自有別、今皇上奉祖訓入繼大統、果曾親受孝宗詔、而為之子乎。果曾親許為孝宗子乎。則皇上非為人後而為人繼之主也、明矣。然則考興獻帝・母興獻太后者。質諸鬼神而無疑百世以俟聖人而不惑者也。臣久欲以請乃者、復得見席書・方獻夫二臣之疏、以為皇上必為之惕然、更改有無待於臣之言者、至今未奉宸斷、豈皇上隅未詳覽耶、抑二臣將上而中止耶。臣故不敢愛死再申其說、并錄二臣之疏、以聞疏奏。上曰、此礼關係天理綱常、便合文武群臣、集前後章奏詳議尊称、合行典礼、以聞。

(42) 『明世宗實錄』嘉靖三年二月丙午。

少師兼太子太保吏部尚書兼華蓋殿大學士楊廷和乞致仕、許之。

(43) 『明世宗實錄』嘉靖三年三月丙寅。

勅諭礼部、聖母昭聖慈寿皇太后、擁護朕躬繼承大統、仰荷慈訓恩德難名、茲特加上尊号為昭聖康惠慈寿皇太后。爾礼部其扨日遣官、祭告天地・宗廟・社稷、恭上冊宝。仍道行天下宗室及文武衙門知之、所有合行礼儀、開具以聞。是日又勅諭礼部、朕恭膺天命入繼大宗、祇奉祖考、孝養宮闈、專意正統罔敢違越、頃歲仰承聖母昭聖慈寿皇太后懿旨、以所生至恩、亦欲兼盡、尊朕本生父為興獻帝・本生母為興國太后。朕心猶未慊然、特命文武群臣集議、皆謂宜加称号、以極尊崇。今加称興獻帝為本生皇考恭穆獻皇帝、興國太后為本生母章聖皇太后。爾礼部其扨日遣官、祭告天地・宗廟・社稷、更上冊宝。仍通行天下宗室及文武衙門知之、所有合行礼儀、開具以聞。

(44) 注 (43) に同じ。

(45) 『明世宗實錄』嘉靖三年七月乙亥。

上諭礼部、本生聖母章聖皇太后更定尊号曰、聖母章聖皇太后。於七月十六日恭上冊文、遣官祭告天地・宗廟・社稷、

即具儀以聞。

(46) 『明史紀事本末』卷五十、大禮議。

何孟春曰、憲宗朝尚書姚夔率百官、伏哭文華門、爭慈懿皇太后葬禮、憲宗聞之。此國朝故事也。

(47) 『明世宗實錄』嘉靖三年七月戊寅。

群臣以前疏不下朝罷、則相率詣左順門、跪伏或大呼太祖高皇帝、或呼孝忠皇帝、声徹于內。是日上齋居文華殿、遣司禮監官諭令退、群臣固伏不起、求愈旨。上乃遣司禮監官伝諭曰、恭穆獻皇帝神主將至冊文・祝文、悉已撰定矣、爾等姑退。群臣仍伏不起。及午、上命録諸臣姓名、執為首者學士豐熙・給事中張紳・御史余翱・郎中余寬・黃待顯・陶滋・相世芳・寺正・母德純凡八人、下詔獄。於是修撰楊慎檢討、王元正乃撼門大哭、一時群臣皆哭声震闕庭。上大怒、命逮五品以下員外郎馬理等一百三十四人、悉下詔獄拷訊。四品以下及司務等官姑令待罪。

(48) 『明世宗實錄』嘉靖三年九月丙寅。

始定大禮称孝宗敬皇帝曰皇伯考、昭聖康惠慈聖皇太后曰皇伯母。恭穆獻皇帝曰皇考、章聖皇太后曰聖母。命礼官扞日祭天地宗廟社稷、詔諭天下。